

## 音楽取調掛とメーソン(音楽教育史研究ノートⅡ)

—メーソンからの書簡—

生地加代

(武庫川女子大学文学部教育学科初等教育専攻)

### On The Japan Music Academy and Prof. Mason

Kayo Ikuchi

*Department of Education, School of Letters,  
Mukogawa Women's University, Nisinomiya 663-8558, Japan*

In 1879 Meiji government established the Japan music academy at the Ministry of Education. Mason, an American music instructor, came to Japan at the invitation of the government. As a result, the basis of music education of Japan was constructed. Mason who was engaged as the first music instructor in Japan, however, suddenly returned to his country in order to revise his book that had been published in America, but at that time the employment contract had not been concluded. In this manuscript, Mason's concern with the music education of Japan can be investigated by a study of Mason's letters addressed to Shuji Izawa, the chief of Japan music academy.

#### 緒言

明治13年(1880)3月、文部省音楽取調掛(現・東京芸術大学)に日本最初の音楽教師として雇用されたメーソン(Luther Whiting Mason 米国人)は、日本の西洋音楽導入と音楽教育の基礎確立に多大の功績を残した。彼は雇用契約が終了する明治16年(1883)3月を待たず、明治15年(1882)6月、唐突にも横浜から帰国の途に就いた。その理由は彼が米国で出版した音楽書籍の改訂のためである。文部省は日本における彼の功績を鑑み、契約破棄の中途帰国とはせず、賜暇帰国扱いとし、帰国費用(450円)を支給し、帰国後の明治16年(1883)1月には記念品(大和錦)を贈り、彼の功績に報いた。

突然の帰国によって、メーソンは日本の音楽教育と没交渉となったわけではなかった。帰国後もメーソンは音楽取調掛と書簡によって親交を深め、日本の音楽教育全般に多くの提言をしている。彼の日本に発信した書簡は『東京芸術大学百年史 東京音楽学校編 第一巻』(東京芸術大学百年史編集委員会編 音楽之友社 1987)に収集されており、現在容易に見ることができる。

筆者は明治時代の音楽教育に関心を持ち、先にはメーソンの日本着任に関して考察した。<sup>注1</sup> 本論稿は明治時代の音楽教育研究の一環として、彼の発信した書簡のうち、音楽取調掛長の伊沢修二に宛てた1885年(明治18)6月の書簡を考察し、帰国後のメーソンと日本の音楽教育との関わり的一端を理解する。

#### 1 メーソンの書簡<sup>注2</sup>

Boston, June 8, 1885

Mr. S. Isawa.

My Dear Friend,

(生地)

I have just returned from the World's Exposition at New Orleans, and find your letter of the date of April 16, 1885. Also a package containing nail sticks, 3 music books and tuningfork.

I have also received the documents which I sent you and a check for \$7750/100 from your Consul in New York on account of the present your Government kindly sent to me.

I congratulate you on the success of your Educational Exhibit at New Orleans — I think your exhibit stands among the very highest including France and United States.

I am especially pleased with the success of Mr.A.Furukawa, Director of the Asylum for the MUTE and Blind in Kioto(kyoto).

I visited this Institution while in your country, and was exceedingly interested in his work. I think he is one of the most remarkable and ingenious men as a Special Educator, that I have ever met with.

I understand that he has received a gold Medal for his Special suggest:

As to the musical instruments which I propose to send to you in return for those you turn over to me for the Great New England Conservatory of Music under the Direction of Dr.E.Tourjee: I would take the Liberty to suggestion

1. That you consult Prof. Eckert as to what he will most need.
2. I Should think you would need two valve French Horns and one or two oboes.

It is not common to have oboes in a small orchestra, but as your Court Musicians would manage those instruments so well, being accustomed to one of their own which is much more difficult to play, and as I understand, that is a favourite instrument with Mr.Eckert, though I would suggest them.

The wind instruments for orchestra must be first class and all of the same system as to pitch. Mr. Eckert will know all about that:

I believe you have the best material as to men in the Court Musicians for a good European Orchestra in the world. You need a good teacher of stringed instruments like the Violin, Viola, Violoncello and Double Bass. Please write me and I will attend to your business with pleasure.

Yours truly.

L. W. Mason

1885年6月8日, ボストンにて

S. 伊沢様

親愛なる友人へ

私は今ちょうど New Orleans の世界博覧会から帰ってきたところです。そして、1885年4月16日付けのあなたの書簡を目にしました。また nail sticks(琴の爪)、3冊の音楽の本(小学唱歌集)と音叉の包みも届いています。そうそう、私があなたにお送りした書類及び貴国政府からの贈呈ということで 7755/100(77ドル55セント?)ドルの小切手も New York の貴国領事館から受け取りました。

私は New Orleans の貴国の教育展の成功を心からお祝いしたいと思います。貴国の展示はフランスや合衆国と並んでかなり高度のものと思います。

特に感激したのは京都の聾啞者・視力障害者のための施設長・A.古川氏に対してです。私は日本にいた時、この施設を訪問したのですが、彼の業績に非常に心を打たれました。彼は私が今までに会った中でも際立った才能のあるすばらしい教育者の一人だと思います。彼の特別展示はまさに金メダルに値するものでしょう。

さて、楽器に関してであります。あなた方が引き渡してくれるものかわりに、Dr.E.Tourjee の指導下にある Great New England 音楽学校のものをお送りすることを提案します。それに関して言わせて

いただけるなら、若干の助言をさせてください。

- 1 Eckert 教授が最も必要としているものは何か、彼に意見を求めること。
- 2 私が思うにおそらくあなた方はピストン式のフランスホルンを2つ、オーボエを1つか2つ必要とするでしょう。小さなオーケストラでオーボエを2つもつのはあまり例のないことですが、もっとむずかしいあなた方の独自の楽器を使用することに慣れているあなた方の雅楽者たちの技量は相当高いと思われるので、これらの楽器(フランス式オーボエ)も上手に扱うことができるでしょう。演奏が難しい日本独自の楽器は、また Eckert 氏のお気に入りのものなのです。だから、こういう提案をするのです。

オーケストラの管楽器は一流のものでなければなりません。ピッチ(音の高さ・調子)に関して同じシステムをもったものでなければいけません。おそらく、Eckert 氏がそういうことは全て判っていると思いますけれどね。

あなた方は世界でも多分、名だたるすばらしいヨーロッパのオーケストラのための宮廷演奏家に最上の楽器を用意することになると確信しています。

そして、バイオリンやビオラ・ビオローネチェロ・コントラバスなどの弦楽器の優れた指導者が必要でしょう。その時、どうぞ手紙で知らせて下さい。私は喜んで尽力するつもりです。

敬 具

L. W. メーソン

※ Eckert 教授(Franz Eckert ドイツ人 メーソンの後任の音楽教師)

## 2 New Orleans 博覧会への音楽取調掛の参加

前掲したメーソンの書簡は New Orleans 世界博覧会の参観報告と楽器の助言とからなる。この時期、音楽取調掛は海外の博覧会に積極的に参加し、音楽教育研究の成果を公開している。当時の博覧会参加は次のようである。<sup>注3</sup>

- 1 明治 17 年(1884)5 月 万国衛生博覧会(London)
- 2 明治 17 年(1884)12 月 綿業百周年博覧会(New Orleans)
- 3 明治 18 年(1885)秋 国発明品博覧会(London)

New Orleans の博覧会はアメリカ南部の綿業誕生百周年を記念し、また南部の商工業の発展の促進を目指したもので、1884 年 12 月 16 日から 1885 年 6 月 1 日まで開催された国際博覧会である。音楽取調掛はこの博覧会の教育部門の「斬新な進歩を示す教育状況」というテーマに応募したものであった。出品展示は「雅楽器之部」「俗楽器之部」「書類之部」の 3 部門からなるが、特筆すべきは次に示す「書類之部」である。<sup>注4</sup>

- 1 小学唱歌集初編、続編、三編 合 3 冊
- 2 唱歌掛図初編、続編
- 3 楽典 1 冊
- 4 音楽問答 1 冊
- 5 音楽指南 1 冊
- 6 音楽取調成績申報書抜萃英文 30 冊
- 7 雅俗樂及唱歌用楽器調音法解説図 8 幅  
外 付録アペンデックス  
和文出品目録  
英文出品目録

この博覧会の参加は、明治 13 年から開始された日本の音楽教育の取り組みと成果を欧米諸国に理解してもらおうとしたものであった。前掲したメーソンの書簡の一節に、

(生地)

I congratulate you on the success of your Educational Exhibit at New Orleans—I think your exhibit stands among the very highest including France and United States.

とあるのは、日本の音楽教育を指導したメーソンの自賛ではなく、その言辭は率直に受け取ってよいと考える。当時の音楽取調掛は欧米諸国の音楽教育と比較して遜色ないと自信があったから博覧会に参加したのである。

日本の音楽教育の基礎的理論は上記の1(小学唱歌集)～5(音楽指南)に確立されていたが、この時期には、まだ東京師範学校附属小学校・東京女子師範学校附属小学校・学習院においてのみ音楽教育が実践されているに過ぎず、全国の小学校では音楽教育がなされていなかった。日本の音楽教育は音楽教師養成の関係から、約10年遅れて明治30年初頭ころから全国的実施の運びとなる。

### 3 New Orleans 博覧会とメーソン

メーソンが New Orleans 博覧会の日本の音楽部門の展示を見たことは前掲した書簡から明らかであるが、彼はどのような立場にあって New Orleans 博覧会に参観したのであろうか。『往復書類』明治17年(1884)には次のようにある。<sup>注5</sup>

今般米国博覧会へ本掛出陳諸品之儀ハ兼テ同国波斯敦音楽院等ト楽器交換ノ内約モ有之候ニ付右閉場後ハ同府エル・ダブリュー・メーソン氏へ送致交換可致見込ニ有之候 総而同氏若クハ其代理人へ引渡候様御取計相成候様該博覧会出張本邦事務官へ予メ御打合せ置相成度文并洋文出品目録相添此段及御照会候也。

今般、米国博覧会へ本掛かり(音楽取調掛)出陳諸品の儀は、兼ねて同国波斯敦(ボストン)音楽院等と楽器交換の内約も之あり候に付き、右閉場の後は同府 L・W・メーソン氏へ送致し交換致すべき見込に之あり候。総て同氏若くはその代理人へ引渡候様、御取計いあい成り候様、該博覧会出張の本邦事務官へ予め御打合せ置きあいなりたく和文並びに洋文出品目録あい添えこの段、御照会に及び候也。

この文書によれば、New Orleans 博覧会出品の楽器は博覧会終了後、Boston 音楽学校等に交換寄贈されることになっており、その仲介はメーソンが行なうことになっていた。これによって、メーソンは New Orleans 博覧会に関連して音楽取調掛と関係があったことが判明する。

加えて、メーソンが明治17年(1884)12月5日、Boston から音楽取調掛長・伊沢修二に宛てた書簡の一節に次のようにある。<sup>注6</sup>

I expect to spend most of this winter in New Orleans, so I shall see your exhibition there and shall take great interest in it. I expect to see Mr. Kuki on my way south.

この冬は New Orleans で過ごすことになろうかと思えます。そしてそこで貴国の展示を見るつもりですし、それは大いに関心があります。南下する途中、九鬼[隆一]氏に会えるかも知れません。

この書簡によれば、1884年末から1885年初頭の冬の時期は New Orleans で過ごし、博覧会见物と明言している。そして、先に全文を示した明治18年(1885)6月8日付けの Boston から音楽取調掛長・伊沢修二に宛てた書簡の一節には次のようにあった。

I have just returned from the World's Exposition at New Orleans.

これによって、メーソンは New Orleans に長期滞在したことは明らかである。New Orleans に行く途中において九鬼隆一(もと撰津三田藩主 メーソンの日本着任当時文部大輔=次官)に会えるかも知れないと述べているから、九鬼隆一とも連絡があったことが判明する。これらの事実から、New Orleans の博覧会の音楽部門の展示はメーソンと深く関係して進行したことは明らかである。

#### 4 おわりに

前掲した明治 18 年(1885)6 月 8 日付けの書簡の一節に、

I have also received the documents which I sent you and a check for \$7750/100 from your Consul in New York on account of the present your Government kindly sent to me.

とあり、メーソンの 77 ドル余りの金銭の授受も New Orleans 博覧会に関係するものかも知れないのである。

このように、メーソンは明治 15 年、音楽教師の職を離任し米国に帰国したが、帰国によって、音楽取調掛と没交渉になったのではなく、米国の博覧会における日本の事業と深く関係し、また音楽取調掛の音楽教育に助言を行い、深く日本の初期音楽教育に関与していたことが看取されるのである。

#### 注

- 1) 「音楽取調掛とメーソン 音楽教育史研究ノート I」 武庫川女子大学文学部 50 周年記念論文集
- 2) この書簡は「東京芸術大学百年史 東京音楽学校編 第一巻」242p 以下に記載されている。
- 3) 博覧会参加は前掲書 189P 以下を参照のこと。
- 4) 「本省各局往復書類」(明治 16 年 7 月～18 年 5 月)は前掲書 192P 以下を参照のこと。
- 5) 「往復書類」は前掲書 192P 以下を参照のこと。
- 6) この書簡は前掲書 241P 以下に記載されている。